



Mi'Te

◆詩と批評◆第155号◆

2021年◆夏◆季刊

◆ ◆

タネル・ムラト Taner Murat

三宅勇介 Miyake Yusuke

柿木伸之 Kakigi Nobuyuki

樋口良澄 Higuchi Yoshizumi

イナン・オネル Inan Oener

笠間直穂子 Kasama Naoko

高野吾朗 Takano Goro

新井高子 Arai Takako

◆ ◆

・本・

〔詩集〕高野吾朗『百年経ったら逢いましょう』花乱社 (2200円) 新刊!

三宅勇介『亀巣』しろうべえ書房 (2750円) (詩歌集)

新井高子『ペットと織機』未知谷 (2200円)

〔翻訳小説〕モーパッサン著、笠間直穂子訳『わたしたちの心』岩波文庫 (924円)

〔評論〕柿木伸之『断絶からの歴史——ベンヤミンの歴史哲学』月曜社 (3960円) 新刊!

樋口良澄『鮎川信夫、橋上の詩学』思潮社 (2970円)

〔訳詩集〕イナン・オネル訳『アタオル・ベフラモール来日記念詩集』私家版

新井高子編著『東北おんば訳 石川啄木のうた』未来社 (1980円)

Edit. by Jeffrey Angles『Factory Girls: Selected Poems of Takako Arai』Action Books (18\$)

・お知らせ 1・

映画『東北おんばのうた——つなみの浜辺で』が、「コロナ時代の銀河——朗読劇「銀河鉄道の夜」』と二本立てで、埼玉大学でオンライン上映されました。7/1に、記念Zoomシンポジウム「詩と朗読と映像と、」(パネラー:管啓次郎(「銀河」出演詩人)、鈴木余位(「おんば」監督)、ケンダル・ハイツマン(「おんば」英語字幕監修)、司会:新井高子)を開催しました。

・2・

映画『東北おんばのうた』大船渡上映会(5/15、於・リアスホール)が、東海新報(4/21, 5/18)、朝日新聞岩手面(5/14)、岩手日報(5/20)などで大きく報じられました。大船渡市末崎町の「居場所ハウス」(6/12)でも上映されました。

・3・

新刊! タネル・ムラト、三宅勇介ほか編著『44 Twin Steps Constanta-Yokohama 1977-2021』
(姉妹都市44年の歩み コンスタンツァ・横浜 1977-2021) Anticus Press (1025円)

ルーマニアと日本の詩人による俳句と写真の作品集。新井も寄稿。amazon.co.jpで購入可。

・4・

新井の詩が『神奈川大学評論』98号(7月末刊行予定)に掲載されます。

・5・

新井の詩「片方の靴」が、日本現代詩歌文学館編『東日本大震災と詩歌』に収録されました。

・6・

サイトの「お知らせ」欄で、『mite』のPDF掲載を始めました。新号が半年限定で読みます。また、『東北おんばのうた』公式ページも「映画」欄を作りました。<http://www.mi-te-press.net/>

【後記】柿木伸之さん、三宅勇介さん、タネル・ムラトさんに寄稿をお願いしました。8年にわたって詩を寄せくださった高野吾朗さんの連載は今号で区切りです。毎号欠かさずの入稿、高野さん、ありがとうございました。ジェフリー・アングルスさんの詩連載はお休みです。

編集: 新井高子 / 発行所: ミテ・プレス / 発行日: 2021年6月30日(水)

寄付を随時受け付けております。郵便局口座: 10090-74894051 名称)ミテノカイ

E-mail: mite@ace.ocn.ne.jp

「ソレデハミナサマ、ゴキゲンヨウ。」

極東的

三宅勇介

*コロナ時の入国際のPCR検査では梅干しの写真により唾を溜む

梅干しの写真で唾が湧き出づる處の天子も書を書きたるか

極東が梅干しならば西洋の唾の由来をわれは知りたし

わが唾は梅干し由來の唾ゆゑにオリエント産の唾つばきと言へり

梅干しの尻の部分を睨みつつ狂氣の如くわれ唾を溜む

唾溜むる事恥づかしと思ひしか検査器持ちて人顔隠す

一斉に下唇を検査器に当て唾溜むるは凄まじきなり

唾湧くを意識する事普段なく湧く事意識する事意識す

そこはかとなく屈辱を覚ゆともその屈辱の来歴知らず

生意気に油虫さへ反射にて唾液を出すとはわれ不覺なり

ウイキペディアの条件反射の項を見よ極東的なる発想ならむ

短詩三篇

Taner Murat

タネル・ムラトⁱ

through a grey window
the dawn breaking
into my soul –
rolling like a jellyfish
to the edge of the light

はいいいろの窓を通して
夜明けが、はじけていく
わたしのたましいのなかへ——
くらげのように揺らめきながら
ひかりのそのきわへ

like a mole
another spring
lurking in the ground –
on the sky-blue streets
cadets, emotions, dreams

まるでもぐらのように
もうひとつの春は
地面で息を殺している——
青空通りには
士官候補生たち、その思い、夢

now and again
looking over the heavy sky –
uneasiness
raindrops falling on me
raindrops falling on the gravel

いま、そして、いまいちど
重たい空をざっと眺めて——
心細くて
雨つぶが降っている、わたしに
雨つぶが降っている、砂利に

(試訳：新井高子)

ⁱ ルーマニアの詩人、俳人。黒海沿岸の都市、コンスタンツァと横浜が姉妹都市であることを記念して、日羅の二十余名による俳句と写真の作品集『44 Twin Steps Constanta-Yokohama 1977-2021』（日本語、英語、ルーマニア語、タタール語の四言語による掲載）がこのたび刊行された。タネル・ムラトはその企画者。日本側は、歌人の三宅勇介が幹事で、大田美和、江田浩司、ジョーダン・スマス、魚村晋太郎、四元康祐、新井高子が参加。

覗き穴の向こう側 高野吾朗

「神々」と呼ばれていた者たちは 冬の訪れとともに
私たちを置き去りにして 我先にとばかり立ち去った
残された我々はそのまま散り散りとなり いまやこの
窮屈な空間を私と分け合うのは あなただけとなった

全ては「神々」のためと信じ込み マスクもせぬまま
働き続けたおかげで 悪性の空気を過度に吸い込んだ
私とあなたの肺は 窓なきこの密閉空間の 日増しに
薄まる酸素を 今日も競うようにぜーぜー吸っている

私の口から漏れるのは 自己嫌惡の感情と呪詛の言葉
そして 破滅を恐れる呻き声だ いまや 私にとって
最大の「神」は 肺にやってくれる息だけであり
最大の障害は その息を横取りせんとする あなただ

「この世になど生まれてこなければよかったです」と私が
こぼすと 隣であったが「君はこの世に何度も生まれ
その台詞を何度も繰り返すのだ」と漏らす わずかな
食料を なぜあなたと分け合わねばならぬ運命なのか

「こんな暮らしが存在しなくなりさえすれば」と私が
こぼすと 「この場所を愛せるなら君の全人生は善だ
それが無理なら君の全人生は悪だ」とあなたが答える
生まれ変わりたい私 今を肯定するあなた 水と油だ

「神々」に従う必要などもはやないのに なぜ私たち
二人は いまだにここから一歩も外に出られないのか
ますます息が吸いづらくなるなか 今日も私は唯一の
楽しみに勤しむ 部屋に残された木炭で 壁に小さな

円を描き それを覗き穴に見立てて 屋外を見るのだ
「今日もあの釣り人が見えるのか」とあなたが尋ねる
「ああ」と答えると あなたも木炭で壁に小さな円を

描いて覗き込む 見えるのは全く同じ老いた釣り人だ

「今日も独りだ 集団を全く信じてないらしい」と私
「今日の餌も あいつが肌身離さず 空き缶に入れて
持ち歩いている 誰かの遺骨の粉末なのか」とあなた
「いや 今日あいつが餌として使うのは 自分の体の

あちこちに ガラスの破片のごとく深く刺さっている
数多くの人間たちの言葉だ それを一つ一つ抜いては
まとわりついている肉片とともに 川へと撒くのだ」
釣り人の狙いは今日も 王として川に君臨する怪魚だ

自分の生き辛さを誰かに告白することもなく まして
誰かを告発することもなく 釣り人はただ怪魚を待つ
急に釣り竿がしなる 物凄い引きだ やっと来たかと
一心不乱に 釣り糸を手繰り寄せると 怪魚の正体は

なんとただの小魚で あまりの卑しさに苦笑しながら
釣り人は自分の中に 怪魚にも似た罪の意識を見出す
生きることにも死ぬことにも もはや興味なさそうに
小魚を握って川の深みに佇むその顔はまるで涅槃仏だ

私もあなたも 釣り人に名前をつけてやりたいのだが
思いつくアイデアは なぜか常に数字の羅列ばかりだ
復讐に燃える小魚の大群が老人の背後に迫るのを見て
思わずあなたが数字を叫ぶと 振り向きざまに老人が

AINSHUTAINのごとく舌を出す そしてそのまま
卑小の大群に足元をすくわれて 川底へと沈んでいく
望んでいたような子供を授かれず 心を病んだ夫婦の
ごとき涙目で その一部始終を覗き続けるあなたと私

釣り人の姿が消えると 全てはまた忘却の彼方となる
肺はなお縮み 息はさらに荒く 木炭さえ残り僅かだ
共有不可能なはずのものを 再び運よく共有した私と
あなたは 互いへの関心を一瞬 失って 快楽に酔う

——もの語りの絵だからですよ。

ぼつやりと、田蓋のつるに描くはずだった絵だからですよ。

耳の穴ぐらサ盲いの声が響くべきやア、おのずと目えの閉じられる。ふうわふ、ふうわら、湧いてくるがや、田蓋の闇に、姫も鳥帽子も、毛坊主も。

だアもの、田明ぎの語り声じやアだめなのですよ。だアもの、いまは昔、であつたよ。いま、これに、おるんだアもの、武者も稚兒も、犬つゝのむ。

恐ろしかつたがしよう、そうげなものが、耳つこ澄ましやア、そうげなものが来てしまアといづれに、おじが、恐ろしかつたがしよう。まして憤死の衆なれば、

ましてでしよう、描くときやア、

震イ上がつておつたがよ、

指も、腕も、

心臓も。

——浮かんでき

浮かんでき来たる」とだけで、生きで、動いでおつたつけえ。

たましいだよ。

ふつわひ、ふつわひ、老若男女、貧富貴賤、暝りやア生がせたものじもを、

見殺しする、

はめ殺しする、

紙の絵が、

——幾重も幾重も霞バ引いて、山も都も、廢ら寺の門前も、ぼつやり描いて。そり、見せて。

だアども、もはや、

動かねア。

嫌がつたがしよう、撮られるのも。たましいべ奪られると、抜かれると、脱兎の(バ)とく尻まくつて

逃げたでしょ。

吸い込まれてしまアからだよ、

やつね、やつね、描れてゐものが、
写真といつて明るい影に。

そお、浮かぐトドキのよ。

逝った人たち、

皿蓋のながに、

やつて来んでしょ、

その顔しか、

動かん顔しか、

写真の顔しか。

あんたアの皿のへりば、

といへんわへ、

死なしちまつた、

死んでしまつたよ。

【トルコ語詩の翻訳 85】
詩人アフメツド・アダの七編の詩

訳 イナン・オネル

炎へ、許してくれ、わたしのただ一つの曲がり角である
ただ一つの道筋である、あなたは、わたしの

恋愛 二十

あなたの輝きは鏡においてのみのことではない、
ベッドで眠りの中で、鳥を放つ

樹木で、庭で、プールで、

葡萄酒の色の太陽にさらしたあなたの顔で

わたしたちは横に並んでキツチンに入るよね
それはあなたの花が咲くとき

わたしの喜びの爆発

一瞬、存在の理由を忘れる

あなたは瞬時に変化する、流れる、波打つ
あなたの声が心の皮に響く、ちょうど

合わさってあなたの美しい声に

二つのわたしたちが一つになる、窓の遠くで

口はといえば不死の歌を歌う

キツチンで、落ちるときに赤い太陽が
ティーポットへ、こうしてわたしは学ぶ

古い愛を、歌から

恋愛 二十一

ああ、恋人よ、この世界の、この人生の

ために何を言うべきだろうか？ 苦痛だけを
与える言語も、まして、まつ毛が、

半分の太陽の存在が、わたしの心を悲しませている

分からない、わたしは行ける先まで

行つた、見当たらなかつた苦痛を与えない

国も、まして、白い馬が

手立てを探す痕跡を残していくた

ああ、恋人よ、悲しませた、苦痛を与えた

私はあなたに、巡り巡つてわたしが書くものは、

そうだ、変わっていく、青い

恋愛 二十二

まとめて飛び上がる風にあたつてあなたの髪は
さあ、わたしを襲撃して、あなたの髪で
気付こうあなたの体の巣を
さあ、わたしを投げ飛ばして、汗をかかせて
わたしの口に草原の息

まとめて愛する、その目、その唇
その嬖においてあなたの接吻が赤い
さあ、すべての規則を破ろう
拗ねた心も棚に上げよう

さあ、襲撃してわたしを、抱いて暖かく、
曲がつて、くねつて、疲れさせて、あなたの重さで、
井戸にぶら下げる、わたしの体を
もう世界にその井戸のほかにどこもなくなつた

恋愛 二十三

四つの雷が鳴つて、あなたの顔が明るくなつた
夜は青い鹿になつた

樹木が倒れた、外で、

あなたの口がわたしの口を見つけた

あなたの指は、生き生きとしていた、絡まつた
わたしの髪に、わたしたちは横になつた、全裸で、
布団の上で

あなたの手は白かつた、その細い指から

一本の小川が流れた、あなたの息が新鮮な空氣だつ

わたしの息に混ざつて跡を残した
嵐に変わるとときに外の天気が
た

雨に変わったときに外の天気が

灰になつて飛び散つた、欲望が、うちで
あなたの世界への心配が内側に残つた
わたしの群れが反乱を起こした

まず四つの雷が鳴つた、赤く

そして、なるようになつて、煙草に火をつけた

恋愛 二十四

あなたのだ、秋の葉

日焼けの器、水差しに

注がれる水、透明で純粹な物語を

持つた水

あなたがやつてくるわたしたちの庭へ

とある水が流れるときヒヤシンスへ

あなたの心である、地球へ

遠くの星を連想させる

あなたの心である、恋人よ、鳴り響く

時計よ、静寂を横切る花よ、

生きる叫びよ、頭を下げない

深いヒヤシンスよ

わたしが丁寧に折る紙はあなたの心である

わたしは薔薇を記した、風を、小麦を記した

あなたの心であるから、大きくなるように

恋愛になるように、この純粹な関係が

恋愛 二十五

わたしに花を送るな、拗ねたから

明白ではないか、この雨の中

目をそらしているのに、別れを

心に刻んでいるのに

きっとあなたは忘れている、わたしの心を挫くよつ

な

言葉をあなたが発したことを、ため息をついたこと

を

わたしの道標となる考え方を聞いたとき
恋愛や革命や永遠に関する

あなたは忘れているようだ、ツバメの
飛行を、ドアのそばで居眠りする
猫を、そう長くからなりで慣れていく
海に気付かないで暮らすのも

わたしをあなたのツバメと呼ぶな、電話を

かけるな、その方がいい

完全に愛さないのであれば

何の役に立つ、愛の詩が？

恋愛 二十六

ああ、わたしの子供っぽく拗ねやすい恋人よ

あなたの心は猫の心だ

あなたの髪は曇った空、ウィットに富んでいる

あなたの唇の髪でこの言葉も

あなたは裸になつて毎晩やつてくる

朝ご飯にはチーズパンに紅茶

あなたはいつもわたしを驚かす

わたしの夜の青い狐

おお、わたしがその中で迷子になつた瞳よ

街路で違法の抗議行動

わたしたちはこの与えられた人生を拒否している

ばかりた太陽もこの昇り方ではだめだ

わたしは覚えていた歌を總て忘れる

あなたの手をとれば市場で

わたしはいつも言う、あなたの日の暖かい魔法は

わたしの不幸の兄弟なのだ

(つづく)

荒くれ兵隊

笠間 直穂子

友よ、友よ、おまえは天国にいたほうがいい
んじやないか
向こうじやバラが人生より長くもつらしい
ぜ
来世つてのはそなんだから

「フランス歌謡録音アンソロジー」というCDセットがある。古い民謡から一九七九年にいたるフランス歌謡史を、全八十八枚のCDアルバムで辿るもので、「十九世纪まで」が十四枚

セット、「一九〇〇年から一九一九年まで」が十五枚セット。そして、一九二〇年以降に関しては、一年につき一枚、という構成になつていて。五十九年分にわたり、CD一枚に収められたその年のさまざまヒット曲を聞くことができるのだ。

まとめ聴きをしないので、なかなか聴き終わらないのだけれど、しばらく前、一九五〇年代の分を聴いてみよう、と思い立つた。エディット・ピアフやシャルル・トレネが後退し、シャルル・アズナヴァール、ジルベル・ベロー、ジヨルジュ・ブラッサンスらが台頭する時代。そうしたスターたちの栄枯盛衰を追うのも面白いが、いまはあまり聞かない名前を発見する楽しみもある。

「一九五四年」のディスクを聴いていて、耳に留まつたのが、ジャン=クロード・ダルナルの「Le Soudard」という曲だつた。この語は「粗暴な兵士」を指すので、「荒くれ兵隊」とでも訳しておこう。ただし、このタイトルには、含みがある。なにしろ、軍隊行進曲をコミカルにアレンジした前奏につづけて歌い出すのは、乱暴どころか、頼りないほどに力の抜けた、なんと優しい声なのだ。

鏡、鏡、鏡の口に挿したは
彼女がくれたふるさとのバラ
そうしてやつは出征した

以下、四番まであるのだが、全体でひとつ短い物語になつていて、全編を訳してしまおう。

支、支、支給の弾薬盒には
大事な者らの写真を入れた
老母に飼い馬、初聖体の自分
そうしてやつは出征した

友よ、友よ、おまえは天国にいたほうがいい

んじやないか

向こうじや記念写真が人生より長くもつら
しいぜ
友よ、友よ、たまげちやいけない
来世つてのはそなんだから

あ、あ、あたまの円筒帽には
雨水を入れて、そのなかに
自分ちの牧場(まきば)のカエルを入れた
そうしてやつは出征した

友よ、友よ、おまえは天国にいたほうがいい
んじやないか

向こうじやカエルが人生より長くもつら
しいぜ

友よ、友よ、たまげちやいけない
来世つてのはそなんだから

敵、敵、敵がやつてきたとき

やつが敵に差し向けたのは、バラの花束と、

記念写真と、
カエル、つまりは愛の言葉

そうしてやつは帰らなかつた

いるかのような軽い歌い方は、デビュー時からずつと変わらない。

友よ、友よ、おまえは天国にいたほうがいい
向こうじや思ひ出が人生より長くもつらし
いな

友よ、友よ、たまげちやいけない
来世つてのはそんなんだから

作詞作曲、ギター弾き語りのダルナルは、一

九二九年、フランス北部ノール県ドゥエの生まれ。一九五〇年代から六〇年代にかけて、ピアフ、ジュリエット・グレコなどの大歌手に曲を提供するとともに、歌い手としてもいくつかのヒットを放ち、プラッサンスの前座としてステージに立つた。「荒くれ兵隊」は、自分で歌つたほか、エディ・コンスタンティース、カトリーヌ・ソヴァージュのバージョンがある。インターネット上には、珍品として、プラッサンスが多少歌詞を改変した歌つた録音も掲載されている。

ダルナルの作詞作曲で今日もつとめ知られるのは、一九六八年にラウル・ド・ガドワルスヴェルドが歌い、ノール県で愛唱される一曲となつた「潮が満ちると」。漁師が潮の満ち引きのたびに、去つた女を思い出す、といふ内容だが、これもまた、悲愴に歌いあげるわけではなく、二拍子で短調から長調に転じる民衆歌風のメロディに乗せて、ふられた情けなれを嘔みしめる、といった雰囲気の曲だ。

一時期は子ども向けテレビ番組の司会を務め、子どもたちと一緒に歌つたアルバムも複数出している。さらに小説や自伝を書いたり、映画に関わつたりもしたのち、一九九一年に八十歳で亡くなつた。歌謡界の第一線で身を削るよりは、ショービジネスの世界になんとなく留まりながら、好きなことに手を出しつつ生きたのだろうと想像させる。

死後に発売された一枚組のCDで、自作自演歌手としての主な仕事をまとめて聴いてみると、童心を感じさせる歌詞と、鼻歌でも歌つて

それで、「荒くれ兵隊」が発表された一九五四年は、反戦歌として名高いボリス・ヴィアンの「脱走兵」が世に出た年である。大統領に向かつて、自分は脱走します、あなたは偽善者だ、と宣言するヴィアンの痛烈な批判とは対照的に、「荒くれ兵隊」は、反抗する」とも知らず、ただぼんやりと出征し、殺される田舎者の兵士を描く。

それでも、「脱走兵」と同様、「荒くれ兵隊」もまた、ラジオで放送禁止になつたという。この年、フランス軍は、なんとしても士気をあげる必要があつた。一九五四年は、八年つづいたインドシナ独立戦争がフランスの敗北に終わり、東南アジアの植民地を失つた年。そして、まだ植民地を諦めきれないフランスが、アルジエリア独立戦争という、さらなる泥沼に足を突つ込む年なのだから。

Le Soudard
Paroles et musique : Jean-Claude Darnal

Anthologie de la chanson française enregistrée, EPM
Musique, [1988-1995?], vol. 2 (1950-1960).

Darnal, Jean-Claude, 50 succès essentiels 1955-1962,
Marianne Mélodie, 2015.

※ボリス・ヴィアン「脱走兵」については、以下に訳詞と解説がある。
ヴィアン、ボリス『シャンソン全集』浜本正文
訳、国書刊行会、一九九一年。

来たるべき眼へのメタモルフォシス

——高野吾朗詩集

『百年経つたら逢いましよう』書評

柿木伸之

エドガー・アラン・ポーの短編小説「群衆の人」の語り手は、都会の人込みのなかに見いだした一人の特異な老人に惹きつけられ、その足取りを追い始める。

この老人は、唐突な方向転換を繰り返しながら人の集う場所へ足早に向かっては、また別の場所へ向かう。

その追跡をあきらめた語り手の言葉を題辞に引く高野吾朗の詩「いのちの階段」に描き出されるのは、無人駅のプラットフォームに立つてその階段を見下ろし続ける一人の老人であり、身じろぎ一つせずに立ちつくすその様子を撮り続ける一人の写真家である。ポーの

小説とは対照的に、影像のように動かない人と、その黒衣の姿を写真に収め続ける人が浮かび上がる。

すると、これもポーの小説とは逆に、写真家の影のほうが濃くなっていく。その先代も、先々代も、来る日も来る日も地下へ延びる暗い穴を見つめながら祈つていた者を撮り続けていたのだ。そして、今やその写真が伝える一人の「聖人」の姿は、「日本語」が話される列島の近代史を、それぞれに凝縮させながら併立している。とくに一代目が追つた、無人島に新しい宗教を興した「救う人」には、山梨の山麓にみずから宗教的一大拠点を築いた末に数々の凶行に及んだ人物の寓意を見ないではいられない。「いのちの階段」という詩は、歴史の積み重なった現代の状況の寓話のように読むこともできよう。

英語と日本語の両方で詩作を続けている高野の日本語での第二詩集『百年経つたら逢いましよう』は主に、「いのちの階段」のようにひと続きに語られる寓話的な詩と、一行から五行の連に区切られながら綴られる、これも寓意的な隠喩が凝縮された詩から成っている。後者の詩篇において特徴的なのは、その各連が、一つの筐体を感じさせることである。実際、この詩集に收められた同種の詩では、すべての連の外観が直方体を

なしている。そして、これを支持体として立ち現わる像は、未だ存在しない装置によって捉えられたかのような硬質な感触を伝えるとともに、どこか予言的ですらある。

例えば、「この国のどこか」という詩の語り手は、古い写真機を持って夢想のなかにいる。その眼は、レンズと一つになつて男と女の肉体へ分け入るのだ。しかし、夢の外では破局が近づいていて、語り手の身体はすでに煙に包まれている。それにもかかわらず、語り手が裸体の夢想に淫するなか、世界は、それを満たす空気とともに壊れていく。「吸い込むのを躊躇したくなれる大気の中、森羅万象がひび割れる」のだ。このとき、みずからが引き起こした破局をなかつたことにしようと/orする声も、詩は捉えている。「見舞い金は出しますので、過去の責任の追及はやめて下さい」という列島の災禍のたびに聞く声を。

「この声が虚しく響くなか、語り手は「蜜に溺れる蠅のよう」に、あるいは「甲羅の中で冬眠中の亀」と化して、眠りに落ちていく。廃墟に残されるのは、子どもたちである。「この国のどこか」に走る一本の道には、語り手の子に統いて「見知らぬ子供たちの列がどこまでも続いている」という。そのように「どこか」の風景を描き出す詩は、十年前に東日本を見舞つた大震災と原子力発電所の過酷事故の後の過程を寓意的に表わしながら、今まさに空々しい狂騒とともに起きようと/orしている破局の先にあるものを暗示している。それと同時に詩人は、みずから詩作を見返している。「私を一心ににらみつける」子どもの眼で。

詩を書くとは、人々が災厄に襲われているのをよそに、古い写真機を手に夢想に溺れることではないのか。そのような問いを抱きながら、詩人は詩作を突き詰めていく。そうして詩にこそ可能なものを追い求めることは、高野にとって、古い写真機を壊して、みずから未だこの世にない装置になることのように見える。その眼の非人間的な解像度は、人が「現実」と呼んでいるものを容赦なく解体する。例えば、「ありきたりなオムレツ」では、「愛」という語で粗雑に括られた人間関係のなかにある葛藤と、獵奇と、人肉食と、その先にあ

る痛々しい親密さが、生々しくむづかしがひんやりとしたイメージとともにえぐり出される。

『百年経つたら逢いましよう』という詩集に見られる詩人の身ぶりは、「うしてもはや人間のものではない眼にならうとする」と、たんに「現実」を解体するだけなく、その「現実」を作ろうとする声にも抗おうとしている。今も、学習機能すら備わっていない自動人形から発せられるように、マス・メディアを通して繰り返し聞こえてくる声に。そのような方向性を示す作品として、「避難命令」を挙げる」ことができる。「そこでは、思考を遮断し、一斉行動を促す声に、「怪物」の絵を描く少女の姿に託された、孤独な思考が対置される。そして、書き終えた少女が紙を食む羊に変容するとともに、思考は対話的になる。

しかし、その対話がどこへ向かったかは示されない。それとともに必ず宙吊りにされると、読み手はこれまで歩んできた世界にあらためて向き合われるわけだが、このとき詩人は、みずからの詩作をアイロニーとともに振り返っているように見える。詩作が詩論であらざるをえないことを引き受ける身ぶりと、読む者をさらげなく衝く詩の力の表われが一つになつているといふに、高野の詩の魅力があるようと思われる。とはいって、詩人が新たな詩の形を追い求めていたことも詩集は伝えていく。再びボーの小説の追跡をあきらめた語り手とは逆に、来たるべき眼への詩のメタモルフォシスを、今後も追つていきたい。

「かき毛・のぶゆき／哲学、美学」

* 高野吾朗詩集『百年経つたら逢いましよう』(花乱社、二〇一二年)

「西脇順二郎『Spectrum』への旅 14

小千谷のメモリとビジョン（3）

樋口良澄

つたに違いない。「これをスペクトラム実践と動態的に呼ぶ」とにする。西脇が詩を書くことの本源は「」にあつたのではないだろうか。西脇は、言語や事物のスペクトラム性を見つめ、それを複数言語の中で変性させることつまりスペクトラム実践によって詩を書いていたと思つよつた」なつた。

3 スペクトラム実践

西脇の詩を通して「スペクトラム」という言葉を考えていいくと、意味深いものが尽きない。「」の言葉から、私などは光や音などを波長によって順に並べた図を思い浮かべていたが、本来は連續体を意味し、病気の症状や化学現象にも用いられる。現在、「」の言葉をもつとも多く日常で目にする例は、「自閉スペクトラム症」だね。」の概念は、「これまで自閉症、アスペルガー症候群など症状に応じてといひえられた広義の発達障害を、緩やかに連続する一つの症候群としてといひ、治療に当たるうとするものである。

」の概念が出てきたとき、人間の心を、光の波長の変化を示す言葉と思つていた「スペクトラム」であらわすのはちよつと不思議な気がした。

「スペクトラム」という言葉自体は、日本国語大辞典によれば、幸田露伴の弟子である小栗風葉の『青春』（一九〇五～六）に「日光に淡く色彩をスペクトラムする」という用例があり、西脇の時代にはすでに流通していただんだ。主体のありよう、言語のありようを連續体としてといひ、いた詩人には、重要な言葉だったに違いない。

しかし、西脇の詩を読んでみると、「スペクトラム」を単に連續体としての言語というスタティックな意味づけより、もっと動態としていふえてべきではないかと考えるようになった。彼は人間や世界の言語としてのあり方、そして言語はスペクトラムであることを考へていただんだ。ただ、その考える主体は、日本語（小千谷の言葉を含む）だけでなく、英語、フランス語、ラテン語……と複数の言語主体をスイッチしていたはずだ。それは翻訳とどうよりは同時並存的な、スイッチとしか言いようのないものだつたのではないか。

おそらく言語のスペクトラム性の表層から深層までを異言語間でさわよつといふが、彼が思考し、詩作するといふたのではないか。

」のよう見いくと、萩原朔太郎などの他の近代詩人に比べ、西脇の詩が、近代的自我をめぐる懊惱から遠い理由がわかるような気がしてくる。彼らの詩には、どうしても「私」をめぐる重苦しい、生硬な言葉が出てきてしまつ。西脇はそれを言語として考へ、言語の中で詩を実践した。「私」もまたスペクトラムであり、変性するのだ。もちろん彼特有のユーモアが、軽みを演出しているのであるが、「」のユーモアも、スペクトラム的位相からの、遠いものの連結による笑いである。

私たちは通常、スペクトラム実践を翻訳としてよみがへる。翻訳を異言語間の移行ことじまひない、言葉以前のイメージや概念を言葉にする」と、言葉をさらに変化させていく」と拡張して考えれば、スペクトラム性の中での翻訳が、彼にとっての詩だったとしてもよじだね。英語と日本語、それにヒンズー語やギリシャ語、土著語日本古語、新潟の言葉など、複数の言語をスペクトラム的位相の中で捉えることができた彼にとって、言葉をその中で移動させることは、極めて面白い、創造的な作業だったのではないか。言葉を転換することによって立ち上がる新たな世界、「」これが彼の創造の源泉だったのだと思う。翻訳は言語だけではなかつた。古典の中のエピソード、概念や行為を、詩の中で他のエピソードに置き換える」とも見てとれる。「」これはむしろ翻案と言つべきかもしれないが、スペクトラムの中で様々なものを変性させることだが、詩を書くことだつたに違しない。

日本帰国後の、日本での第一詩集『Ambarvalia』冒頭のあまりにも有名な「天氣」の第一行「覆された宝石」は、キーツの詩の翻訳だということは衆知の事実である。「」の詩があまりにも素晴らしいので、第一行が翻訳がどうかなふふふふむよし」という。しかし、「」これまであまり省

みられた」とはなかつた。日本での第一詩集冒頭に翻訳を入れた」との意味は、考へてもいいだらう。彼は、血ひる世界における翻訳の重要性を宣したのがもしれない。

天気

(覆された宝石) のやうな朝

何人が戸口にて誰かとおめめへ

それは神の誕生日。

また、『Ambarvalia』の中には翻訳詩も入つており、非

日本語主体と日本語主体を往還していた初期の西脇について、スペクトラム的位相は、(あるがまま) の世界だったとも言えるのではないだらうか。

そして、言語や事物のスペクトラム的位相を探求する姿勢は、生涯変わらなかつたようである。詩の実作ではもちろん最後の詩集『人類』までの実践が行われたし、研究者としても『古代文学序説』や、晩年のギリシャ語と漢語の比較研究においてますますその実践を深めていったと言えるのではないか。

詩集『スペクトラム』では、前回書いた小千谷の冬をめぐる情景は、例えさ「タラの海」、「北の春」で書かれている。「北の春」では、雪国によくやく遡つてきた春の喜びが、コミカルに描かれている。

あそこには

回復期がある

オレンジの国の人々にはわからよつもない回復期

新しい愛 新しい信仰

貧しく寒い国の人々は駆け出し 口づけをする

半年も姿を隠していた大地に

仰向げに寝てコマのよつに廻る

歓喜 歓喜!

おお 热い国の人たちよ

やつてきや

あそこで暮つしてみて！

おお詩よ ちつぽけなものよ

美を望んで、何もしないですがつているな
熱くなつた草原から降りてきて

神がそうするようにお前の魂を賣ばせろ

詩は偉大なものではなく、ちつぽけなもの。しかし、単に芸術を追求する」とは否定され、高みから降りてきて自分の魂を癒さなければならぬ。

そして詩人は、次のように語られる。

あわれな者よ

どんなに長く歌つたのか

パッションが星たちの臉の方へ

感情が暖かいひざりの曲線の方へ

熱狂が悪じ若者の方へ 歌わせた

「あわれな者」、poor man=詩人の情熱、感情、熱狂を笑い

飛ばすよつな記述だが、自己批評でもある。」のユーモア

は西脇の詩全体に通じるものだといつ。

*西脇順三郎の作品の翻訳に際し、著作権継承者の西脇順一氏の許諾を得た。また、訳文作成に関して、ジェフリー・アンダルス氏の助言を得た。記して各関係者に謝したい。(1)の項続く)

「あそこ」は小千谷で、「オレンジの国」はヨーロッパの中でもギリシャ、イタリアだらう。「寒い国」と「熱い国」としてコミカルに転換されてくる。いつした転換が、詩が生まれる」と、それは西脇にとっての上ない喜びだつたのではないだらうか。ただし芸術至上主義的な行為では決してなかつた。「北の春」かくやかんと示してみよう。

うたと劇中歌

——唐十郎ノート番外編3

新井高子

新型コロナウイルスの蔓延のなかで、わたしがはじめたことのひとつは、CDやYoutubeなどで物語の朗読や落語を聞くこと。夜、劇場に出かけていたかわりに。

そこでも夢中になったのは、唐十郎の名作『少女仮面』（一九六九年）初演の主役、白石加代子。彼女の江戸川乱歩『芋虫』の朗読などは、なんど聞いても身の毛がよだつ。小説のすじのみならず、それぞれの人物の声色と心根、その先の先っぽまで、白石の声はじつにきめ細かい。そこまでやれてしまふことが「恐怖」で、それによって立ち上がりてくる、目蓋のなかのぼうやりした像に「恐怖」する。朗読界の美空ひばりだろう。桁が違っている。

そんななか、白石の『百物語』が再演されると聞いた。恥ずかしながら、広く話題になつたそれに、わたしはこれまで出掛けたことがなかつた。コロナの感染拡大で中止になるんじやないかとハラハラしたが、昨年末、念願かなつて生でも聴くことができた。当日は半村良『簞笥』がメインの構成だったが、デザートのように最後に上演された短い作品は、和田誠『おさるの日記』。

ながらく日本語教師をしているわたしには、その職業上の目や耳でテキストに向かつてしまふ癖もあつて、『おさるの日記』は留学生の聞きとり教材にぴたりだと思つた。小学生を日記の書き手にしたそのテキストは、一文一文が短く、日本語教育文法やその語彙からの逸脱がなく、さらに愉快だ。そういう点では、ねじれた長文が含まれたり、その文法などを逸脱したり無視したりする嘗みのなかで、文章は大人になるのかとも思いつつ、さつそネットで検索する。偕成社から絵本として出版されていた。文・和田誠、絵・村上康成。

さりに、白石による音源もぜひともほしい。だが、それが含まれたCDはあいにく廃盤になつていていた。ヤフー・オークションなど、中古流通もしつこく当たつたが、残念ながら入手できない。

ならば、じぶんでやればいいではないか。自作詩ばかりとはいへ、たまにはわたしも人前で読んできた。とはいへ、俳優的な朗読の技術はない。巧みに声色を変えるなどできない。だが、その本には、おしゃれでかわいい絵も付いている。それを紙芝居のように見せて読めば、そのあたりも補われるのではないか……。

そして新学期がはじまつた。授業に集まる人々との気

心も通い合つた夏のはじめ、やつてみようと思った。この優しい留学生たちは、むやみなわたしの挑戦にひたむきに耳を傾けてくれた。その拙さをフォローしたい意味合いもあり、日本には伝統として絵解きや紙芝居などがあり、その潮流のひとつとして、絵本文化の豊かさがいるというような、ウンチクも加えたのだった。

それから、学生たちに読み聞かせの感想を言い合つてもらつてはいるときだつた。インドからの留学生が「先生、きょうはありがとうございました。そして、面白いことあります。でも、このように絵を見せながら聞かせることがあります。でも、このように詩を見せても驚きました」とはしません。だから、きょうはとても驚きました。すると、ミヤンマーからの留学生も、「わたしも驚きました。ミヤンマーもインドと同じです。絵はこうのなかでそれぞれが描くものです」。

わたしはすっかり打ちのめされてしまったのは言うまでもない。いや、ほんの出来心で試みたこの日の読み聞かせを通じて、もつとも驚き、感動したのはわたしだった。

目蓋のなかのイメージなるもの、現実の光景を越えた像なるもの、すなわち「想／像」を人間が歴史的にどう捉えてきたか、どう大事に温めてきたか。大げさなようだが、その深みと躊躇いのとてつもなさが、授業のひとこまに出現したと感じたのだ（本稿では詳述しないが、このあたりは、『ミテ』掲載の「大船渡ノート」でも、古語「けり」と当地の「たつけ」を比べるなどして考證てきた）。

さりに、ミヤンマーでも、いどもたちには絵本ではなく、もっぱら詩を聞かせていると教えてくれたその留学生は、当地では小学校の教科書にも詩はふんだんにあり、中等・高等教育に入つてもその役割は大きく、さらに、ミヤンマーで執筆されている小説の多くが詩をも抱え込んでいるのだという。つまり、作家はおのずと詩人なのだ。「詩はあらゆる文学の要」とは、格言めいた言い回しの「ことではなく、当地では、具体的に、さまざまど、暮らしの節々で感じられる実感のよう」。

そして、そのときの詩は、文字としてだけでなく、幼な子にも伝えられるような声、始源的にはある種の定型性をもつた声としてある。楽器といつしょに聞かせたりするという意味では、広義の「うた」と言つてもいいだろ。すると、ある面では、「うたはあらゆる文学の要」と言い替えることもできるのではないか。

じつはこの四月から、和光大学の公開講座で、中世

宗教思想と芸能の研究者、山本ひろ子が開講する「旅する女たちの伝説」を受講している。柳田國男の論考や語曲のテキストなどをもとに、熊野比丘尼らが旅先各地に運んだ和泉式部伝説などの読み解きをするその講義はスリリングで、毎週、知的に興奮する。

つまり、留学生とのこの一件は、じぶんでも山本の配布資料やテキストを読みながら、あれこれ夢想しているさなかでもあった。そうしながら気付いたことのひとつが、いろいろな伝承が口頭で運ばれるときの拠りどころのひとつにあるのも、やはり「うた」だということ。

和泉式部伝説の場合、五七五七七のそれだが、式部の真作だけでなく、露骨に下手な贋作も含みつつ、その伝承が膨らみ、語り継がれてきたことの意味合いを柳田は探る。つまり、時を越えて記憶され、変型も含めて、内容的にも地域的にも、伝承が広がって肥えふとつていくために、ニセモノの和歌がむしろ必要になつたのである。柳田の論考は言うまでもなく懐が深く、さまざまな脈絡を同じ文章からすくい上げる」とができるようだが、わたしが読みとつたことのひとつは、伝承を運ぶための基礎、その大事な凝縮として、うたがあるということ。

そこで思い起されるのが、わたしにとっては、やはり唐十郎なのだった。唐演劇のほとんどが劇中歌を抱えている。それは一種の歌劇と言つていい。そして、一五三号のノートでちらと書いたが、わたしはじぶんが惚れ込んだ戯曲の劇中歌のほとんどを口ずさむことができる。おなじ芝居を繰りかえ見に行つたので、しぜんに覚えてしまつただけながら、その後、戯曲論を綴つたり推敲したりするとき、そのうたはおのずと思い出される。音痴だろうが、書きながら口ずさみもある。すると、公演から何年も経つていて、じぶんでも驚くくらいすらすら歌うことができる。その芝居の情景や役者の声もみるみる蘇つてくる。まるで、テントのるっぽのなかにまたいるように……。思いが溢れて、歌いながら泣いてしまうことさえある。

つまり、熊野比丘尼たちがうたを拠りどころに伝承を運んだのと同じことを、まさしくわたしは戯曲でやっているんじやなかろうか。朗詠の抑揚で口にされなくなつた現代でも、五七五七七の記憶の働きは高く、歌人たちと話していると、多くの秀歌を彼らが諳んじていることに感心する。比丘尼たちの時代も、それを把つ手に、からだに蓄えられてある伝承の引き出しがたぐり寄せられたことだろう。そして、唐演劇を見たわたしとまるで同じように、彼女らが旅先各地で出会つた聴衆たち(多くが文字を知らなかつただろう)もまた、うたを拠りどころにしてそのはなしを受けとり、記憶したに違いない。

唐作品にとって劇中歌は重要な役割を果たしているのは、観劇すれば一目瞭然だが、それと同時に、ミヤンマー人やインド人が「詩はあらゆる文學の要」と感じているようなゾーンでも、力を及ぼしているのではないか。

演劇は、じぶんにとって、単に作家のミクロコスモスを見せるだけではない、観客を根源的にクリエイティブにするものだ、とかつて唐十郎は語っていた。知識として、中世日本の芸能や南アジアの文芸を彼がどれほど知つていたかはわからないが、芸能的身体の本質として、河原乞食を標榜して独自のテント興行をし続けた肉体として、根つこの感覺で唐はそれらを通じ合つていたのではないだろうか。

うたがあればこそ、観客のからだの深い部分にそれはながらく生き続ける。口ずさめば、芝居の火むらがまたこころに灯りだす。直観や無意識であれ、それを知り抜いていたに違ない。唐の劇中歌は、例えば愛の告白めいた場面で表れるものも、じかにそれをする歌詞ではない。深い謎かけのようなことばが歌われる。そして、よくよく噛みしめて味わえば、じつは芝居ぜんたいの結晶に感じられる。

ミヤンマーのほとんどの小説には、詩が含まれていると学生は言う。それは、口承文芸なるものが、普遍的に、広義の「うた」とともにあつた」との名残りのすがたでもあるよう気がする。

* 資料

- ・ 文・和田誠、絵・村上康成『おさる日記』(偕成社、一九九四年)。
- ・ 柳田國男『柳田國男全集』(筑摩書房、一九九七年)
- ・ 唐十郎『観客の変質』『せりふの時代』三一号(小学館、一〇〇四年)
- ・ 山本ひろ子「旅する女たちの伝説」『和光大学公開講座オーブン・カレッジぱいでいあ』(和光大学、二〇一二年度開講)

一 英語とヒンディー語と同じぶんの民族語のトリリンガルのインド人留学生(いまや日本語も達者だが)のほうにも、この件を尋ねてみた。子どもの頃から詩を耳で聞いて育つた彼だが、ヒンディー語で書かれた現代小説のほとんどに詩が含まれるが、英語で書かれた当地の小説にはそれがないという。この点も意味深長に感じる。